

第12回 森の広場市民観察会
観察ガイドブック



オニヤンマ

主 催: 森の広場市民観察会実行委員会
共 催: 新城縁故者委員会

「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズパシヨウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同 (2006.5)

■ 生物観察のポイント

- [生育環境] どんな処にいましたか？
- [行動(動物)] どんな行動をしていますか？
- [状態(植物)] どんな状態(芽立ち・花・実など)ですか？
- [生物の種類] 特徴的な形や色を観察しましょう。スケッチなども有用です。
- その他気づいた点などをどんどんメモしましょう。自宅へ帰ってからメモを確認しながら調べると、とても勉強になります。

秋の虫(コオロギ・バッタ・キリギリス1)

エンマコオロギ (コオロギ科)

各地に普通の大型(体長:30mm前後)のコオロギです。鳴き声も素晴らしく秋の鳴く虫の主役です。飼育はスズムシの飼い方と同じで良いのですが、わざわざ飼育しなくても空き地などで普通に生息しています。8月の初めころから鳴き出しますのでスズムシの様にペットショップの販売対象にはなっていないようです。



カンタン (コオロギ科)

体は横白色扁平でクズなどの葉裏でよく見られます。鳴き声は「ロロロロロ」または「ルルルルル」と連続した柔らかく美しい鳴き声です。暖地では山地へ行かなければ聞けません。青森では緑地でごく普通に鑑賞できます。地上には降りずにクズやヨモギなどのヤブに普通です。



タンボオカメコオロギ (コオロギ科)

体長は15mm程度の黒いコオロギでやや湿度のある草むらに普通にいます。雄の頭はやや扁平になっています。雌は丸い頭で体色が少し褐色が掛かっています。リッ、リッ、リッ、リッ、と連続した鳴き方と3〜4回ごとに区切って鳴く場合があります。



ハネナガフキバッタ (バッタ科)

緑色の体に灰褐色の翅があり、飛翔力があります。平地よりはブッシュに生息し、ササの葉上などに見られます。幼虫時代はフキやヨモギなどの葉上に群がって食害し、フキの葉などを穴だらけにしています。近似種のイナゴモドキより緑色が強く、後腿節に不明瞭な黒色紋があります。イタドリなどを食べます。



秋の虫(コオロギ・バッタ・キリギリス2)



ヒナバッタ (バッタ科)

黒褐色で小型(体長25mm程度)のバッタでよく飛びます。屋や乾燥した草原に普通です。しかし、数回追いかけると疲労して飛べなくなります。雄は翅と後脚をすり合わせて「シュルシュル」と音を出します。雌は雄よりも少し大きく音は出しません。



ミカドフキバッタ (バッタ科)

体は緑色で翅は痕跡的な小さな褐色の小片がペタッと付いているだけです。ハネナガフキバッタの翅が無くなったような体形です。後脚腿節下面が赤いのでよく目立ちます。クズの葉上などにいます。秋には裸地に出てきて土中腹部を挿しこんで産卵する♀個体を見かけます。



アシグロツユムシ (キリギリス科)

翅が長く身軽に藪の上を飛び回ります。脚が黒っぽいのが特徴です。森の広場では遊歩道周辺の藪で普通に見られるツユムシです。近似種にツユムシ、エゾツユムシ、セスジツユムシなどがいます。鳴き方は葉っぱの上を歩きながら「ジチキッ、ジチキッ、…、…」と断続的に低い音で鳴きますので聞き取りにくい様です。



ヒメクサキリ (キリギリス科)

やや湿った草原に見られる細長い切るギリスです。緑色型と褐色型があります。鳴き声は「ギーー」または「ジーー」と長く発音するのですが少年時代は「ギーー」と聞こえていたので「ギーギーガス」と呼んでいました。でも老化した耳には聞こえません。長い翅があるのにほとんど飛びません。ただし、歯が丈夫なので下手に掴むと噛みつくかも…。

秋の虫(トンボ1)

アオイトトンボ (アオイトトンボ科)

金属光沢のある緑色のイトトンボです。性熟した雄の複眼はブルーに変わり、胸部の下半分や腹部下面などに白粉が生じます。幼虫(ヤゴ)は細長くて繊細な感じで、イトトンボ類の中では遊泳力があります。尾鳃には羽状で暗色の斑紋があります。オオアオイトトンボとの区別点は胸部の斑紋で可能ですが、性熟個体雄の複眼や白粉の状態では区別できません。



オオアオイトトンボ (アオイトトンボ科)

体色は金属光沢のある緑色でアオイトトンボと同じですが性熟しても白粉を生じません。多数の個体が特定の樹に集合することが観察されています。しかし、森の広場ではどの樹に集まるのかまだ不明です。



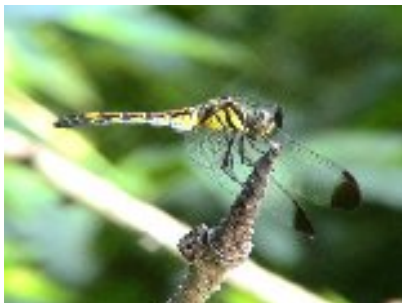
モノサシトンボ (モノサシトンボ科)

イトトンボ類の中では大きい種類で、ヤゴは止水性のやや富栄養化した池などに発生します。ヤゴは全体が黒褐色で尾鳃は良く発達して体長とほぼ同じくらいなので他のイトトンボ類のヤゴとは一見して見分けられます。モノサシトンボという名前は成虫の細長い腹部に白い目盛模様があることから付けられた名前です。



ノシメトンボ (トンボ科)

アキアカネよりは大きく子供の頃は「クルマトンボ」と呼んでいました。翅の先端に半円形の黒褐色の斑紋があります。性熟した雄の腹部背面は暗赤色になりますが雌は暗赤色にならずに腹部下面に白粉が生じます。(画像は雌)



秋の虫(トンボ2)



ウスバキトンボ (トンボ科)

毎年南方から繁殖しながら北上するトンボで、梅雨の晴れ間に気流に乗って飄々と現れますが、ほとんど止まることが無く空に漂っています。しかし、秋には画像の様になぶら下がった状態で止まっている個体が観察できます。羽化した頃のアキアカネを少し大きくしたようなトンボです。



アキアカネ (トンボ科)

最も普通に見られるアカトンボです。成虫の寿命は長い方で、初霜が観察される頃まで生きた成虫がいます。羽化するのは7月ですが夏の間山間地へ避暑移動していますので山へ行けばたくさんの黄色い未熟個体に遭遇できます。秋になれば成熟して腹部が赤くなった個体が続々と平地に移動して産卵します。



ミヤマアカネ (トンボ科)

平地よりは低山地のトンボで、森の広場でもわずかに飛来していたのを見えています。翅には横褐色の帯模様があり(未成熟個体)縁紋はアキアカネなどでは黒色なのに対し黄色で大きく、性熟した雄の腹部ほか縁紋翅脈も赤くなって美しいトンボです。大きさはアキアカネとほぼ同じです。



マユタテアカネ (トンボ科)

羽化する時期はアキアカネなどと一緒ですが羽化場所付近にとどまり、やがて性熟して腹部が真赤になった雄が池や小川に見られます。雌は腹部が赤化せずに翅端が黒化する(ノンメトンボ型)タイプと翅の基部が黄色を帯びるが翅端が黒化しない2型があります。

秋の虫(チョウ)

ゴイシシジミ (シジミチョウ科)

小型のシジミチョウで翅の表面は雄雌ともに黒褐色です。裏面は白色で名前の通り体に比して大き目の黒い斑紋があります。幼虫は肉食でササのアブラムシを食べるので、成虫もササ藪の上でよく見られます。



メスグロヒョウモン (タテハチョウ科)

名前の通り雌の翅は黒く、イチモンジチョウの様な色調です。雄はヒョウ模様で別種の様に見えます。夏のチョウでオカトランオやサワヒヨドリ、ヨツバヒヨドリなどの咲く頃、他のタテハチョウ科の個体に混じって訪花吸蜜しています。



ヒメアカタテハ (タテハチョウ科)

あまり多いチョウではありませんがアカタテハよりはやや赤みが薄い感じの中型のチョウです。秋には比較的多く、アザミやコスモスなどの花にやってきます。飛び方はスピードがあり、活発に花から花へ移動します。翅の裏面には複雑な模様があります。幼虫はヨモギやゴボウなどを食べます。



モンキチョウ (シロチョウ科)

ごく普通に見られる黄色のチョウで大きさはモンシロチョウと同じくらいです。雄は黄色、雌は白っぽい個体と雄のように黄色の個体があります。各地の原っぱでモンシロチョウよりはやや活発に飛び回って色々な花で吸蜜しています。幼虫はマメ科のミヤコグサやアカツメクサ、シロツメクサなどを食べます。



秋の植物(木の実1)

秋は実りの季節です。森の広場で観察できる木の実をまとめました。鮮やかな色彩で遠くからでも目立つもの、地味な色で見つけにくいものなど色々な果実があります。高い梢なども良く見ると、色々な発見や観察ができるでしょう。



エゾツリバナ (ニシキギ科)

5月頃に咲く淡緑色の花は目立ちませんが、秋には鮮やかな深紅の実が目につきます。つり下げられたように咲く花の形から名付けられました。森の広場では、西側の観察路沿いに植栽されています。



ヤマブドウ (ブドウ科)

山地に生育する野生のブドウ。ワインなどに加工される場合もあり、食用になります。花は初夏に開花しますが、目立たないので注意しないと気づきにくいでしょう。森の広場では、樹木の比較的高い場所に実を付けている場合が多いので、見落としやすいと思います。



ノブドウ (ブドウ科)

夏に緑色の小さい花を多数つけます。秋に、緑・白・青・紫など色とりどりの実をつけますが、ブドウタマバエなどの寄生が多く変形した実も多く見られます。本来の実の色は緑で、色づいている実は寄生されたものです。ヤマブドウと異なり食用にはなりません。

秋の植物(木の実2)

ヤマボウシ (ミズキ科)

初夏に4弁の白い花のような総苞が目立ちます。花は中心部の緑色の部分です。秋に赤く熟す集合果(たくさんの子房が集まり一つの果実のようになったもの)は食用になります。味は酸味が無いので美味しく感じないかも…。



タラノキ (ウコギ科)

新芽(タラノメ)は春を代表する山菜として有名です。夏の終わり頃に大きな花序を出し、白い花をたくさんつけます。果実は秋に黒く熟します。



ガマズミ (スイカズラ科)

初夏の頃、枝先に白い花をたくさんつけます。果実は秋に赤く熟し、甘酸っぱい味で食用になります。森の広場では、近縁種のミヤマガマズミも観察でき、葉の先端の尖り具合や実の大きさなどに違いが見られます。



キブシ (キブシ科)

早春につける花穂は、穂状に垂れ下がるクリーム色で非常に目立ちます。雌雄異株です。昔の婦人は成人すると歯にお歯黒を塗る風習があり、後に既婚・未婚のサインにもなり、その材料に用いられました。



秋の植物(木の実3)



ミツバアケビ (アケビ科)

熟した実の形から古くは「開け実」と呼ばれたことから名付けられました。青森で見られるほとんどの「アケビ」は、「ミツバアケビ」です。「アケビ」の小葉は5枚ですが、本種は3枚です。実を食用とするほか、蔓をかご細工などに利用され、茎は生薬としても用いられます。



ヌルデ (ウルシ科)

葉軸に翼(軸に付属する扁平な突起物)があるので分かりやすいです。夏の終わり頃白い花をたくさんつけます。実は秋に赤く熟します。(写真は若い果実)まれにウルシかぶれをおこす場合がありますので、過敏な人は注意が必要です。



ヤマウルシ (ウルシ科)

全国各地に生え、雌雄異株です。春に黄緑色の小さな花を多数つけて、実は秋に淡褐色に熟します。果実の表面には短い剛毛があります。樹液に触れるとウルシかぶれをおこしますので、注意が必要です。



オニグルミ (クルミ科)

雌雄異花。初夏の頃に下垂する雄花序と直立する雌花序をつけます。秋に熟す果実は、緑色で硬い殻の中の種子は脂肪にとみ、食用になります。リスやネズミなどの重要な食料源になっています。

秋の植物（キクのなかま）

オオアキノキリンソウ（キク科）

「セイタカアワダチソウ」の近縁種だが、これは日本の在来種。草丈は数十～80cm位。名前は「大きな」+「秋に咲く」+「麒麟草」の意。整腸・風邪などに対する薬効がある薬草とされていて、若芽は食用にもなる。



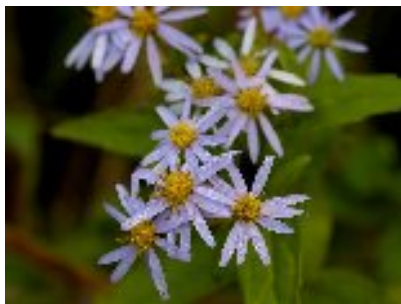
ゴマナ（キク科）

草丈は1.5m程になる大型の草本植物。名前の由来ははっきりしない。茎の先が多数の枝に分岐し、黄色い管状花の周りに白い舌状花を持った頭花がたくさん咲く。葉と茎に細毛があり、ザラザラしている。若芽は食用になる。



ノコンギク（キク科）

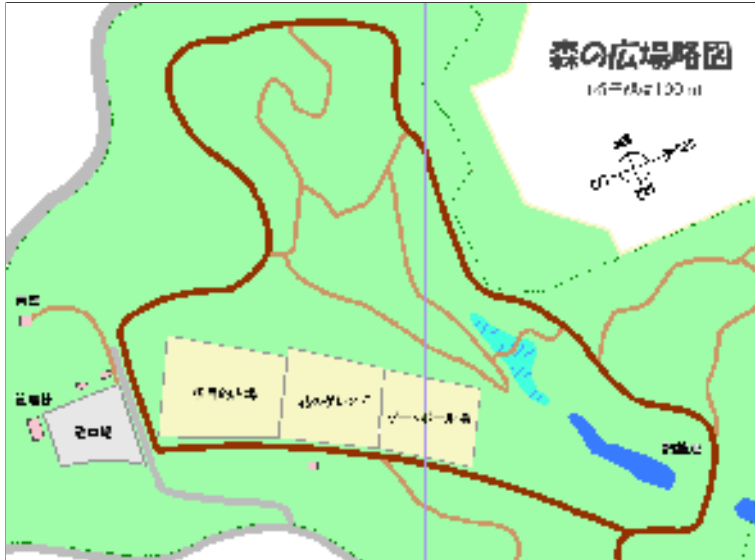
本州～九州に分布し、人里から高原まで生育するのでごく普通に見られる。名前は「野に咲く紺色のキク」の意であるが、花色は濃色から白っぽいものまで変化に富む。草丈は50cm前後。森の広場では、晩秋でも花を付けている株が観察できる。



ハンゴンソウ（キク科）

日本全国に分布する草丈1mを越える大型で多年生のキク。名前は、葉の形状を幽霊の手に見立てて「反魂（魂を呼び戻すこと）草」と付けられた。若芽は食用になるが、アクが強い。森の広場では、多目的広場の西側観察路沿いに多数の株を観察できる。





■ 野外観察にあたってのご留意事項

■ 野外における危険性について

- ✓ 現在「森の広場」の一部道路は、危険防止のため立ち入り禁止になっています。
- ✓ 「森の広場」には、皮膚かぶれをおこす「ウルシ」などの植物や刺されるとショック状態を引き起こす「スズメバチ」などが生息しています。危険性を認知して行動して下さい。
- ✓ 「森の広場」の観察路は非常に良く整備されていますが、急勾配の部分も有ります。濡れた路面や水辺などで足を滑らせて怪我をしないよう、慎重な行動をとりましょう。
- ✓ 自然の中では、大なり小なりの危険性が伴いますので、ご自覚の上行動には充分ご注意下さい。

■ 野生生物の保護について

- ✓ 鳥や小動物などを驚かせないように静かに行動しましょう。
- ✓ 足で踏みつける事によって弱っていく植物が有ります。足下にも気を配り、観察路からはずれる事は最小限にしましょう。
- ✓ 生物の採集は、より良く観察するための手段の一つです。ただ、多くの人が採集などを行うと自然のバランスが崩れてしまいます。採集や切り取りなどは可能な限り控えて下さい。
- ✓ 「森の広場」は、そこに生息する生物たちの生活の場です。将来にわたって生き物たちが暮らせるよう、「彼らの世界に、私達がお邪魔している」という気配りで接しましょう。